



共生の時代

'08
6月

●発行:グリーンコープ共同体育理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876



自然と人の共生

— 生命の水いま私たちにできること —

2008年度「シャボン玉フォーラム in ふくおか」が4月11日・12日、福岡市で開催されました。全国のせっけん運動に取り組む生協や団体に参加し、「水」という視点から自然と人がどのように共生できるかを共に考えた2日間でした。

実行委員長の園田由紀子さんは開会挨拶で「水は生命の源、その水環境は年々悪化している。せっけんを使うことから水環境を考えていく必要がある。このフォーラムを、私たちがいま地球環境にできることは何かを考えるきっかけにしてほしい」と述べました。

1日目は基調講演とパネルディスカッション、2日目は各分科会に分かれて水環境について学びました。

今号で1日目(全体会)のようすを、2日目(分科会)を次号で報告します。

(3面に関連記事掲載)

主催	協石連《協同組合石けん運動連絡会》
会場	グリーンコープ生協ふくおか アクロス福岡(福岡市)
参加人数	全体会1346人 分科会649人(合計) 第1分科会124人 第2分科会129人 第3分科会72人 第4分科会106人 第5分科会75人 第6分科会81人 第7分科会62人
1日目全体会	開会式 オープニングコンサート 石けん利用伸張率優秀団体表彰 基調講演 パネルディスカッション
2日目分科会	第1分科会 「初心者向けの石けん講座」—せっけんってエコっていい 第2分科会 「未来ある子どもたちとともに水環境を考えよう」 第3分科会 「水環境の過去・現在・未来」住んでいる地域の川を見つめ直してみませんか 第4分科会 「生命の水」は住民と行政が連携した街づくりから 第5分科会 「アジアとの共生」—暮らしの中のアジア 第6分科会 「2008年度シャボン玉月間の行政訪問活動に向けて」 第7分科会 「豊かな自然を未来の子どもたちに伝えたい」

「水の惑星」地球の「水環境」は大きな危機に直面しています。みどりの地球をみどりのままで子どもたちへ手渡すために「生命の水」について考えてみませんか。

世界の水事情

天笠 啓祐さん

水について討論をするにあたり、地球をみて日本・世界で水が置かれている、今の状況を把握しておく必要があります。

地球は「水の惑星」。しかし、地球全体の水の約97%が海水で、氷山などの水を除くと人間が利用できる水はわずか0.03%です。また、水が循環するのに地

パネルディスカッション

パネルディスカッションでは天笠啓祐さんをコーディネーターに迎え、中村哲さん、宇根豊さんがそれぞれの立場から水と生命と農業をとおして見える水環境について討論しました。

日本では、水道水に関する水質基準が改定され、すべての農薬が検査項目から除外されました。農薬が水道水に混入すれば一般家庭に供給される可能性がありますが、また、合成洗剤の陰イオン系界面活性剤に加えて陽イオン系界面活性剤が水質基準の検査項目に入りました。しかし、放射能は入っていません。

驚くべきことに、今、日本人は一人一日300mlの飲料水を購入しています。現在企業による飲料水の商品化がすすみ、牛乳より高い価格で売られています。将来、世界中の水の75%が多国籍企業三社に支配されると予想されています。これは食料支配にも繋がる大変危険なことです。水が金儲けの道具としてその価値



中村 哲さん
ベシワール会
現地代表・医師



宇根 豊さん
NPO法人「農と自然
の研究所」代表理事



天笠 啓祐さん
食の問題を市民、消費者の立場で考える
ジャーナリスト

水を神様がくれた恵み

40年以上前、高校時代の先生が「日本が世界に誇れるのは水だ」と言ったこと

宇根 豊さん

ご飯を食べる時、水は見えますか？ 今の私たちは米から稲が育つようすを想像することができなくなっています。ご飯1杯は米粒3000〜4000粒(稲3株)です。その稲3株が育つ田んぼは、オタマジャクシ35匹が育つ環境を作っています。田んぼの水で生きるカエルやオタマジャクシを身近な自然の生きものとして感じることは大切なことです。私たちが毎日のご飯を食べることは自分の生命の糧にするためだけにありません。自然の生きものを支えることであり、つながることなのです。

宇根さん

かつて農業を使わなかった頃、水の汚れは貴重な栄養源となり、生きものを育てていました。汚れはマイナスではなく豊かさとなっていた。そんな豊かな水になるようにすればいいのではないのでしょうか。中村さん 自然は人間が破壊した分だけ、しつぱ返してきます。私たち一人ひとりの水・自然との向き合い方に将来がかかっています。天笠さん 自分ができるところから考えて、身近なところから一歩一歩はじめませんか。

Contents

グリーンコープを創った人たち(3) グリーンコープ連合第二代会長 清藤 シゲ子	
人として母として ありのままを生きる	2
2008シャボン玉フォーラムinふくおか基調講演 生命の水—涸れた大地に用水路を作り 生命の水を再び大地に呼び戻す—	3
特集 「環境にやさしい暮らし」を!	4・5
メーカー・生産者からのメッセージ(3) 南高有機農法研究会	
自然と人との共生を追求し これからも産直のカタチをめざす	6
100万人のキャンドルナイト グリーンコープがめざす生活協同組合③	7
組合員・ワーカーズ・職員リレーメッセージ 未来へつなぐ20年 私の思い	8

20年の歴史を創った原点に戻る



グリーンコープ連合
第二代会長 清藤 シゲ子



混沌とした生協活動の中で、清藤は人として母としての立場を貫き続けた。それが、組合員事務局を誕生させる足掛かりとなった。さらにそれは、グリーンコープ連合の中に理事会室（組合員事務局）を厳然と存在させる原動力ともなる。1994年、連合初代会長の武田から会長職を引き継ぐまで、副会長として創設期の動乱の中でグリーンコープにおける一つの位層を守り抜いた。それは今や、皓皓たる存在として認知されてきた。

人として 母として ありのままを生きる

時

は1970年代、高度経済成長期を受けて、食の世界ではファストフードが台頭し、日本の食生活の大きな転換期となった頃だった。清藤は3人の子どもを抱え普通に子育てをしていた。その生活圏内に、言わば突然に「生活協同組合」がやってきた。それが「ほくちく生協」だった。その頃の生協は何やら胡散臭くもあり、しかし、人の心の琴線に触れる感性を持ちあわせていたようだ。生協が何なのかは知らなかったものの、「牛乳など、普通にはないこだわりの食べ物があるらしい」。清藤は何の気負いもなく生協を受け入れ、忙しい子育ての日常とは違う、異質な世界にいつの間にか飛び込んでいた。若い母親のフレキシブルな感性が、誕生したての生協と響きあったと言えるのかもしれない。

行岡との出会いと闘い

一つの理念を持って生まれた生協にもやがて変化が訪れる。例えば、事業の確立が求められ、組合員活動の模索がはじまる。そうした中、ほくちく生協の経営が悪化。再建のために熊本からやってきたのが行岡（グリーンコープ連合初代専務理事）だった。その経営手腕には定評があつたものの、清藤には「乗り込んできた余所者」と映った。ある時、行岡が「コンピュータの導入」を強く推しすすめた。生協が時代を生き抜くためにアナログ的な事業から「近代化」への道を選択したのだ。結果、ほくちく生協はさらに大きな赤字を抱えることになり、理事会の場合は経営に責任を果たすための赤字対策の検討に終始した。修羅場だった。「経営の主体はどこにあるのか」「組合員の存在意味は？」「組合員は経営にどこまで責任を持つのか」など、沸々と湧き上がってくる疑問から解放されることはなく、清藤は行岡に徹底的に抵抗する。が、理論武装などできるはずもなく、ただただ組合員としての感性と叫びをぶつけていった。それは生協の中で組合員が組合員のままで存在していくための闘いだった。この時の格闘が、後の組合員と専従職員の間係性の構築、数ある生協の中でグリーンコープだけにしかない組合員事務局創設へとつながっていくことになる。

もう一つ、清藤が「命がけ」でやり抜いたことがある。組合員の思いや願い、夢を語りあう場としての組合員の活動拠点である地区運営委員会の創出。そして、組合員主権を謳い上げた地区組合員総会の開催だ。それは生協が本来有すべき組合員主体の骨組みを確立させる原動力ともなる。グリーンコープの中で豊かに守られてきた組合員主権の思想が育まれる契機となった。

組合員としての尊厳を守り、その位置を確立する

「近代化」のための議論は意外な局面へと動いた。「組合員は経営にも何ものにもその主体を翻弄されてはいけない。組合員は組合員のままで存在すべきだ」という清藤のこだわりと叫びが行岡を変えたのかもしれない。そして「組合員の主体を生かす」ために核となる組合員事務局構想が行岡から提案された。理事長



逝く子への愛惜 それこそが自分自身

「我がままであれ」。それは自分の意に即して生きる、ということであり、自分を大切にすることだ。自分を大切にできる人は、他の人を信じ、認め、受け入れ、大切にできる。行岡が教えてくれた「人間のやさしさ」と「言葉」によって清藤は「あるがままの人間」のままで生きてこれたのだ。このような生き様は当然3人の子どもたちへも引き継がれ育まれていた。とりわけ長男政昭は医者として生きることをおとして母親の生き様を体現していたのだ。そう気が付いた矢先の昨年8月、政昭はひとり天上へと旅立っていった。清藤の哀しみは暫し癒えることはない。それもまた、ありのままの自分なのだから。

たのだった。

その後、ほくちく生協から生まれた組合員事務局は、グリーンコープ連合理事室へと引き継がれていく。しかし、グリーンコープ連合は設立されたものの、行く手を阻むように困難が待ち構えていた。その中で「理事会室」という存在もなかなか認知されなかった。行岡は「3年の思い」と言っていたが、3年どころではなかった。組合員の夢の一つひとつカタチにできるのは、それを支える組合員の事務局があるから。今こそグリーンコープの中で組合員事務局はなくてはならない存在だが、その制度の確立の陰には、人と人の、言葉と言葉の想像を絶する相克があつた。



アフガニスタンの子どもたち 水路が完成し笑顔がこぼれる



(上) 完成した水路 護岸用に約14万本の柳を植えた
(下) 用水路作り 蛇籠を積んでいるところ 人の手で水路は作られていく

2008シャボン玉フォーラムinふくおか

いのち 生命の水

—潤れた大地に用水路を作り 生命の水を再び大地に呼び戻す—



旧ソ連による侵攻（1979～88）後、反政府ゲリラと政府軍との内戦、その後タリバン支配、2001年9・11同時多発テロ事件後のアメリカによる報復攻撃、更なる内戦など、度重なる争いに翻弄されてきたアフガニスタン。今、数百年に一度という大干ばつに見舞われ、それによる飢餓や病気は深刻です。
現地で支援活動を行っている中村哲さんから「水とは」「生命とは」一つひとつの言葉に込められた力強いメッセージが会場に響き渡りました。

基調講演要旨



中村 哲さん

プロフィール
1946年福岡市生まれ。九州大学医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。ベシャワール会現地代表。PMS（ベシャワール会医療サービス）院長。

医療活動のはじまり

1984年5月からハンセン病治療のために医療活動を開始した。ところが、ハンセン病があるところでは他の感染症の巣窟でもあることが分かった。そこでアフガニスタン北東部に3診療所を開設し、山岳無医村での難民や貧困層への医療活動をはじめた。

水とパンを

旧ソ連の撤退後、内戦は

続いたが、難民の多くは自力で帰還した。ところが2000年7月、中央アジア地域で大干ばつが起きた。国民の大半が自給自足の生活を送っているアフガニスタンは最も被害が大きく、100万人の餓死者が出た。水も汚染され赤痢などの病気が広がった。飢餓と病気の深刻な状況が続いた。病気のほとんどは清潔な水と食べものがあれば起こらない。「この状況を何とかしなくては」と井戸の掘削を中心とした水源確保事業を開始した。

その最中アメリカが同時多発テロの報復攻撃を開始した。飢えて大勢の人々が

水の力の偉大さを知ったのはこの大干ばつの時だ。9月、診療所の周囲は木も枯れ、人々も村から離れてしまった。水がないところに人は生きていけないということだ。「水を取り戻せば人々も戻ってくる」。そこでカレーズ（伝統的な地下水路）の修復をして水を引いた。わずか5ヵ月後、大地は緑を取り戻し、植えた小麦も見事に育った。「村に水が戻った」と聞きつけて次々と村人が戻ってきたのだ。本当にうれしかった。その喜びは例えようが

村が蘇る

死にかけている危機的状況にもかかわらず、国連は制裁を加えた。ニューヨークテロに対して哀れみの声は世界中から届いたのに、アフガンに対しては救助も何もなかった。「アフガン問題の緊急課題は空爆ではない。水とパン（食料）だ」。空爆下、ベシャワール会を通じて集まった日本からの支援金と現地の同胞のためならという人々に支えられて、1800万トンの小麦粉を飢えている人たちに配った。

日本の知恵で用水路を

大干ばつが続くアフガンの人々に必要なものは「水と農村の復活」と考えた。そこで、医療支援に加えて農業用水確保のための用水路建設も開始した。建設工法は、現地の人が簡単に補修できるものにしたかった。日本の伝統工法の蛇籠（じやかご）という、金網に石を詰め込んだものを用水路の内側面に用いた。こうしてできた用水路に柳を植える。すると、針金は錆びてなくなるが柳の根が天然の護岸機能をする。近代化する前の日本の農業土木技術がこれほど役立つとは思わなかった。

第1期工事13kmが約4年かけて完成。第2期工事8kmは今年6月完成予定である。工事の完了した地域では緑の大地が蘇りつつあ

る。すべての工事が完成すれば、数十万人が楽に食べていけるようになる。難民化したのは戦争だけが原因ではない、生命の源である水が不足したからだということを忘れてはいけない。

自然 生命 平和

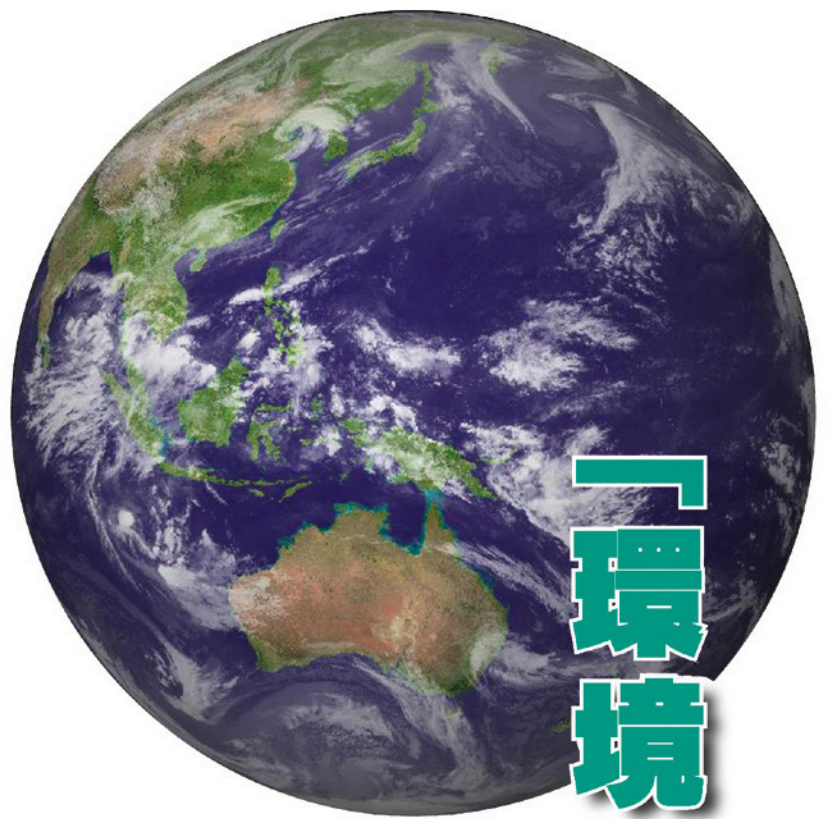
大干ばつの原因は地球温暖化だと言われている。生命の水の源であるヒンズークシ山脈は氷河をゆっくり溶かして大地を潤すことを止め、一気に溶かし大洪水を起こした。その後長い乾燥がもたらされた。連綿と続いた自然の生態系が破壊されたということなのだ。その自然と向きあい、共に生きるために用水路を造った。水が戻ってくるとトンボ、牛、子どもがまたやってくる。生命のかけらもなかった所に魚が戻ってくる。それを狙って鳥が来る。生命の営みが少しずつ戻ってきている。だが、これはアフガニスタン全土のごく一部に過ぎない。「アフガニスタン復興」とは、学校建設や電気が供給されることだけではない。平和の基礎は、人々が水を



干ばつ時の診療所周囲のようす 大地は枯れ果てた



水路修復後の診療所周囲 緑が蘇った



「環境にやさしいくらし」を！

20年以上の歴史を重ね すすめてきた環境問題への取り組み

グリーンコープは環境を守るためのさまざまな取り組みを行い、循環型社会をめざしてきました。それは、グリーンコープの設立以前、せっけん派生協の頃からです。環境にやさしいせっけんを使うことや、ごみの総量の規制など積極的に取り組んできました。グリーンコープ設立から20年、地球環境の悪化は全人類の問題として叫ばれていますが、一向に改善されません。そうした中でグリーンコープでは、びんリユースやトレーのリサイクルなど、「今」できることに精一杯取り組んできました。そのグリーンコープの日常的で誠実な取り組みを経過を追って検証します。

グリーンコープの 前身生協の時代からの 取り組み

1960年代の高度成長期以降、「大量生産」「大量消費」「大量廃棄」をする社会構造が進行してきました。便利で豊かな生活が日常となる一方、大気汚染や産業公害による多量の廃棄物の発生など、環境問題が大きく浮上してきました。



そうした時代背景のもと、環境問題に大きな関心を持った母親たちが組合員となり運動の中心となっていました。グリーンコープの前身生協がせっけん派生協と言われていたように、健康と水環境を守るせっけんの取り組みは当時から今日まで続いています。また、長野県の主婦がはじめた牛乳パックの回収運動に連帯し、九州で最初に取り組みだのも前身生協です。スーパーマーケットや自治体での取り組みのさきがけとなりました。また、さんご礁の海、沖縄の石垣

の理事長が中心となり、リサイクルの取り組みなどの先進地視察やごみ問題の現状、河川や大気汚染状況などの学習を重ね、2000年に「グリーンコープ環境政策」が策定されました。政策の内容は、「廃棄物・水環境・大気汚染・有害化学物質による環境汚染と生態系破壊・エネルギー・食糧問題」と多岐にわたっています。



びんリユース

びんは素材成分が溶出しない安心な容器で、くり返し使うことでごみの減量につながります。グリーンコープではできるだけ多くの食品にびん容器を使用し、回収・再利用を積極的に行ってきました。

1996年、びん種を6種類に統一し、びんメーカー、製品メーカーによる総合的なリサイクルシステムを構築しました。「洗って」「返す」という呼びかけは定着し、現在グリーンコープの7割を超えるびんが回収・再利用されています。

また、2003年からは、念願のびん牛乳が開発され、牛乳びんのリユースもはじまりました。1本約300gの超軽量びんで、約30回くり返し使用しています。キャップも回収し、リサイクルされています。牛乳びんのほぼ100%の回収・再利用により、グリーンコープの環境への取り組みは、大きく前進したと言えます。



トレー to トレー

環境ホルモンが社会問題となっていた1998年、グリーンコープで食品のトレーをリサイクルする「トレーtoトレー」のシステムが開始しました。資源への負荷を少なくし、ごみの排出量を減らすため、使用したトレーを再びトレーとして蘇らせるシステムです。トレーの素材は環境ホルモン溶出の心配のないポリプロピレン、ポリエチレンと添加剤としてタルクを使用しています。

回収したトレーは、細かく破砕・洗浄され、高温で溶かして粒状にした後、新しい原料を追加して再びトレーとして生まれ変わります。回収時に汚れが残っていると破棄しなければなりません。組合員がきちんと洗って返すことでリサイクルが可能になります。

グリーンコープが、業者と連携して開発した、トレーからトレーを再生するシステムは、日本でもはじめての画期的な取り組みです。



塩ビ追放運動

ダイオキシンは、塩化ビニルなどの塩素を含んだごみを焼却することによって、発生します。グリーンコープはすべての包装材をポリエチレン製のラップに切り替えることはもちろん、全国の仲間と共に、1998年には塩化ビニルを原料としたラップを大量に製造・販売している企業に対し、製造中止と代替素材への切り替えを要請する取り組みを展開してきました。

これに対し、塩素系樹脂の廃止や代替素材に切り替える企業も現れましたが、塩ビラップの二大メーカーは、塩ビを使用し続けています。



1999年11月、街頭キャンペーン

行政も焼却場の大型化や高温化によってこの問題を解決しようとしていますが、高温での焼却は重金属による汚染の懸念や、莫大な資金を要することなど、根本的な解決にはなり得ていません。行政・企業の取り組みが必要ですが、消費者一人ひとりが強い意志を持って、塩ビを追放していくことが大切です。

松葉によるダイオキシン調査

1998年頃から、環境ホルモンの中でもとりわけ大きな社会問題となっていたのがダイオキシンです。

グリーンコープでは1999年から6年間、地域や自治体の協力を得て、ダイオキシンを蓄積しやすい黒松の葉を採取し、大気中のダイオキシン濃度を調査してきました。さらに学習会や報告会を重ねるなど、地道な活動が続けることで、社会の関心を高めてきました。

調査の結果、1999年からはじまった国の対策により焼却炉の改善や新規立地がすすんだため、2004年度には、調査を開始した年に比べると約3分の1になり、年々大気中のダイオキシン濃度が低下していきました。

ダイオキシンの発生のおおよそ8割が、都市のごみ焼却によるものだと言われています。私たち一人ひとりが意識を持ち、ごみを増やさない工夫をし、その輪を広げて循環型の社会を作っていくことこそ、解決への道と言えます。



熊本県八代市の小学校でのダイオキシン濃度調査のための松葉採取の様子

河川・水道水の水質調査

環境ホルモンによる人体への影響が懸念された1998年から4年間、身近な動植物が生息し海へ流れ込む河川や、直接私たちの口に入る水道水の汚染状況を知るため、九州各県と山口・広島県の河川と水道水の水質調査を行いました。

測定したのは、工業用の合成洗剤などから溶出するとされるノニルフェノール、プラスチックや缶の容器などから溶出するとされるビスフェノールAと、環境ホルモン農薬、水田除草剤、ゴルフ場使用農薬から測定可能な数種の農薬です。調査の結果、いずれも微量が検出されましたが、その量も徐々に減少に転じました。

4年間継続して取り組んだことによって、組合員の意識も高まり、グリーンコープの社会や行政へ向けた環境監視運動の一つとして認知されました。



1999年1月、熊本県緑川の水質調査の様子



島白保に予定された新空港建設の中止運動は、前身生協からグリーンコープ連合に引き継がれました。

グリーンコープ設立時それぞれの思いを束ねて

グリーンコープ連合設立時、それぞれの生協には、それぞれ独自の「容器」や「包材」がありました。それらをグリーンコープとして統一するためには大きなエネルギーが必要でした。しかし、例えばチューちゃん（現ポツキンチュー）のプラスチック容器の使用は、全体で取り扱うまで、取り扱う生協と取り扱わない生協とに分かれていたように、一方の思いを他方に

をテーマに学習会の開催などを継続的に行っていました。また、2007年から「六ヶ所再処理工場（核燃料の再処理）」に反対する運動」にも全国の仲間と共に取り組んでいます。

グリーンコープ環境政策への着手

1993年、グリーンコープの組合員の思いを結集した「夢ヲかたち」(中期計画基本構想)が策定されました。それは、組合員が主体的に自らの思いを自分たちの手で表現し政策とした画期的なものでした。そのマスタープランの一つに、環境の問題が掲げられました。その後、会員生協

勢を大切にしています。このようにグリーンコープは「今できること」に取り組みながら循環型社会をめざしています。

時を逸せずに次々と取り組まれた環境問題への対策

「環境政策」の策定に着手している間にも、次々と取り組みがスタートしました。1996年には「びんのリユースシステム」が確立。ワンウェイびんも再生が可能な透明茶色のびんになりました。2003年には念願のびん牛乳を開発、びんのリユースは格段にすすみました。1998年には「トレイトトレイト」

の取り組みも開始。翌年にはたまたま容器のモウルドバック化と回収（ダンボールなどに再生）もはじまりました。

1998年、環境ホルモンの問題が浮上。グリーンコープは全国の生協や団体と共に「環境ホルモンの市民テラブル」(1998年設立)を立ち上げ、精力的に取り組みました。環境ホルモンの世界的研究者であるカナダのスキヤレン博士やイギリスのスキヤレン博士を招き講演会を開催しました。組合員の学習となったばかりではなく社会的にも大きな啓発となりました。また、松葉による

ダイオキシン調査や塩ビラップの回収運動、河川や水道水の環境ホルモン水質調査にも継続的に取り組みました。

2007年改定が予定されていた「容器包装リサイクル法」については、2004年国会や地方議会へ請願署名を全国の仲間と共に届けました。しかし、2007年の改定には「拡大生産者責任」や「リユース」や「リデュース」の文言が入っていません。今後の取り組みの必要性が確認されています。

「でんきを消して、スロウな夜を」を合言葉に、夏至の夜の2時間電気を消す運動は、少しずつ広がっています。

次の一歩をめざして

グリーンコープは環境問題への地道な取り組みを一つひとつ積み重ねてきました。現在「商品の包装・仕分け袋・カタログの回収」が課題となっています。これからの組合員一人ひとりと共に、「環境にやさしい暮らし」の実践が弛みなく続きます。

※4R(リデュース(減らす)・リユース(再利用)・リサイクル(再利用))

ごみの問題と組合員の要望との狭間で

飲料へのストロー添付について

2005年頃、紙パックの子ども用飲料にストローを添付するべきかということについて、大きな論議となりました。

それまでグリーンコープでは、ごみの軽減のため、飲料へのストローの添付はしないという方針で商品を取り扱ってきました。しかし、小さな子どもを持つ母親たちから、ストロー添付を望む声が寄せられました。これまでの方針を貫くべきという考えと、組合員の要望を重視すべきという意見があり、検討を重ねました。

これまで少しでもごみを減らそうと包装容器のリユースやリサイクルに取り組んできました。一方では、組合員の要望を大切に、少子化や高齢化に対応しての食品の小規格化、個包装化などに伴うごみを出しているという現状もあります。

結果、ストローの添付については組合員の要望を尊重し現実を見据えた上で、子ども向け紙容器の場合に限り実施することとしました。もちろん、利便性のみを追求するというのではなく、ごみを減らすという基本は堅持した上で、なおかつ組合員の要望に対しては一つひとつ十分な協議の上、柔軟に答えていくというスタンスに立つことにしたのでした。

メーカー・生産者からのメッセージ

3

南高有機農法研究会

共に歩んだ20年

グリーンコープはこれまで、関係する多くのメーカー・生産者との信頼関係をベースに食べものの安心・安全を確立させてきました。設立から20年、あるいは設立以前から、共に歩んできたメーカー・生産者とおして見えるグリーンコープを紹介します。

第3回は、温暖な気候と豊かな土壌に恵まれた長崎県の島原半島で有機農業に取り組んでいる産直青果生産者グループ「南高有機農法研究会」（以下、南有研）。現在、グリーンコープの産直生産者グループの草分け的存在でもある、会長の荒木隆太郎さんに話を聞きました。

自然と人との共生を追求し これから産直のカタチをめざす



トマト生産者と共に（左中央が荒木さん）

の新たな挑戦への活力にもなった。

生協との出会い

ある日、荒木さんは「共同購入向けにパレイショがほしい」と島原の農家を訪ね歩いていたら兼重さん（当時のふくおか西部生協専務理事）と出会った。時代は1970年代、高度経済成長期にあり、大量生産・大量消費が叫ばれていた。その一方で食品公害や食品添加物の氾濫を懸念して、食の安心・安全を求めようとする消費者の関心が高まっていた。当時は現在のような無・減農薬や有機農産物などは稀で、玉ねぎ・パレ

の新たな挑戦への活力にもなった。

「出会ったのはまったくの偶然です。当時、農家はどこも生協を相手になどしていませんでしたから、兼重さんは途方に暮れていたようでした」と振り返る。偶然にも生まれた年が同じ1947年。その当時は2人とも若く、食べものや農業のこれからのあるべき姿などについて語りあい意気投合した。

1972年、「安心な食べものを子どもたちに」という母親たちの思いから誕生したふくおか西部生協（グリーンコープ生協ふくおかの前身の地域生協の一

つ」と南有研との産直がスタートした。

初めての出荷はパレイショがトラック一台分の量しかなかった。荒木さんら仲間間は早朝、島原から福岡市内までトラックを走らせ、12カ所あったセンターに届けていった。

組合員との交流も同時にスタート。バスを連ねて援助作業に多くの組合員が訪れた。都市部に住む組合員らは南有研のホコホコした畑の土に歓声をあげていた。「自宅に泊まっていく組合員さんもありました」と当時を懐かしむ。

自然の生態系に沿った農業

1992年には兼重さんが力を入れて取り組んでいたBMW技術を取り入れた。『効果はこうです』とひとりで表すことは難しい。でも土本来の力を発揮できるよう手助けするといふ点では学ぶことが多いですね。そういう自然そのものが持つ力に共鳴すること

「何か特別なことをめざそうとした訳ではなく、『やりたい!』と思ったことをやってきた。それは農業を生業としてきた自らの暮らしや環境を守っていくことだったのです。生協の成長と共に自分たちも成長してきたのだという。」

20年経った今でも荒木さんは、グリーンコープのかかわりの原点となった兼重さんとの出会い、そして一緒に中国を旅した日のことを忘れはしない。

南有研は1970年、地域の農村青年研究会会員だった荒木さんから10人の若者が結束し発足させた。きっかけは当時、地域で当然のように行われていた大量の農薬散布について疑問を抱いたことだった。「畑に農薬を撒いた日の風呂はシャワーで済ませろ」。荒木さんはそう親から聞かされ、何の不思議もなく習慣としてやってきていた。ところがある日、体中に現れた赤い発疹に目を見張った。しばらくすると治まったが、同じことが二度三度続き、「あつ!」と思い当たった。いくら長袖の作業着や帽子などで覆っても、

微細な農薬の成分は体を蝕む。ひと風呂浴びた後のアルコールも手伝って、血液の循環がよくなったところに全身、発疹が出たのだ。自身の体が示した危険信号に、「これでもいいはずはない」と直感した。

農薬を排除した農業を、まずは自分たち自身のためにしなければ、思いを同じくする仲間と出荷組合をスタートさせた。これまでの農薬や化学肥料の散布で地力が弱まっていた土壌を回復せようと、昔ながらの堆肥づくりに着眼した。結果、荒木さんらは農協から締め出されてしまったが、逆にそのことが南有研



南有研で作られている作物（一部）

とができるようになったのは、兼重さんに大きく影響を受けたのだという。

南有研では40年余、年2回パレイショを栽培してきた。その間一度も連作障害はなく、安定した収量を上げてきた。土作りも然ることながら、剪定した芽一つたりとも畑から持ち出さずに、そのまま土の中に鋤き込んできた。こうするようになったのは「道沿いの雑草に連作障害はない。なぜ?」と気が付いたことがきっかけとなった。「連作障害に對し農業をしている者なら誰でも何かしら対策をしてしまう。けれども自然の生態系に習えば必ず何か発見がある」。自然から学ぶとする真摯な姿勢が南有研に貫かれてきたから「今」があるのだろう。

さらなる産直関係を共に創る

こうした荒木さんの農業のあり方に賛同した仲間が、現在30人。後継者もたくさん育った。今では年間を通じて玉ねぎや人参・レタス・いちご・トマトなど出荷品目は多種にわたっている。



100万人の キャンドルナイト

2008.6.21 夏至～
2008.7.7 セタ
20:00－22:00

◇問い合わせ先
100万人のキャンドルナイト事務局
(大地を守る会・大北)
TEL03-3402-8841 FAX03-3402-5590
<http://www.candle-night.org/>

でんきを消して、スローな夜を

「100万人のキャンドルナイト」静かに広がる！

「電気を消して、スローな夜を」という「100万人のキャンドルナイト」の呼びかけは、2001年、「原発を1カ月に1基作る」というブッシュ政権の政策に反対した、カナダ市民の自主停電運動がヒントになってはじまりました。

日本では、2003年の夏至の日からスタートしました。今年で6年目、環境庁とも連携した取り組みとして展開、毎年少しずつ広がってきました。

今年は6月21日（夏至の日）から7月7日（セタ）をキャンドルナイトの期間としています。世界の平和や温暖化防止、エネルギーの節減などを願って、6月21日と7月7日の、夜8時から10時までの2時間、各地の施設や家庭でいっせいにライトダウンし、スローな夜を過ごすことを呼びかけます。

グリーンコープのエリアでも灯されたロウソク

2007年、グリーンコープエリア内では山口県柳井市の柳井川に約500本のロウソクが浮かび、熊本県玉名市で15,000本のロウソクを灯して音楽祭が開かれるなど、さまざまな取り組みがありました。韓国やオーストラリア、モリシヤス、台湾など世界の国々も参加しています。昨年の実施箇所は日本全国で63,138カ所、削減電力量は2,932,013キロワットでした。

グリーンコープでも2006年から、グリーンコープ生協ふくおかが独自に取り組み、今年度はオールグリーンコープの取り組みとして方針化されています。



ロウソクの光で、子どもに本を読んであげるのもいいでしょう。

しずかに恋人と食事をするのもよいでしょう。

ある人は省エネを、ある人は平和を、ある人は世界のいろいろな場所で生きる人びとのことを思いながら。

プラグを抜くことは新たな世界の窓をひらくことです。それは人間の自由と多様性を思い起こすことであり、文明のもっと大きな可能性を発見するプロセスであると私たちは考えます。

一人ひとりがそれぞれの考えを胸に、ただ2時間、でんきを消すことで、ゆるやかにつながって「くらやみのウェーブ」を地球上に広げていきませんか。

でんきを消して、スローな夜を。

（キャンドルナイト呼びかけ人代表）

グリーンコープがめざす

生活協同組合



日本の生協運動の
はじまりと発展

日本にはじめて生協が生まれたのは125年前（明治12年）、当時は社会基盤も弱く数年で消滅してしまいましたが、現在につながる市民型生協が誕生したのは大正時代。生協の育ての親として著名な加賀豊彦が現在のコープこうべを設立したのもその時代です。しかし、生協が社会的に意味のある存在になったのは、第2次大戦後、店舗を中心にした職域生協が多く設立されはじめてからです。

1960年代には、大量生産・大量消費の高度経済成長期に突入しました。急激な経済成長によって、産業公害やカネミ油症・森永砒素ミルク・水俣病などの深刻な食品公害が引き起こされました。そうした状況の中で、多くの母親たちは「家族の健康を守らなくては」とい

う強い意識を持ちました。その母親たちの思いは「市民生協」の設立や生協での安全な食品作り・環境問題への取り組みなどの原動力となりました。グリーンコープの前身生協の多くもその時代に誕生しました。

この頃から、生協は組織的にも経済的にも大きく成長し社会的な影響力を強めていきました。その背景には、日本独特の班共同購入がありました。組合員が地域の身近な人たちと班を作り、班が互いの情報交換の場となりました。生協から班、班からそれぞれの家庭や地域へとつながることで、生協運動が広がってきました。

そして現在、日本全国の生協への加入組合員総数は2251万人（2005年）という数になっています。

新テーマで募集中

グリーンコープ誕生20年によせて

グリーンコープに加入したきっかけなど

私の好きなグリーンコープ商品

商品にまつわるエピソードなど

●4000字程度●毎月月末住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード（5000円分）進呈。

●住所・氏名などの組合員の個人情報には、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561

福岡市博多区博多駅前8-36 博多ビル7F

グリーンコープ福岡センター（ワーカース連）宛

「共生の時代」編集部

FAX 06248117876

Eメール rikoho@greencoop.or.jp

2008年4月の組合員数 **384994人** (4/20現在)

リユース リサイクル データ 2008年3月分

牛乳びん	リユースびん	トレイ	モールドバック
回収本数 906,939本 回収率 100.1%	回収本数 213,761本 回収率 66.6%	回収重量 13,080kg 回収率 56.9%	回収重量 36,360kg 回収率 85.6%
（12月17日～3月15日回収分） 廃缶供給本数のカウント方法を別途見てください			

放射能汚染測定結果報告(176)

2008年3月度

放射能汚染食品測定室検査。NDは、検出限界値（1ベクレル/kg）以下です。
※は、グリーンコープ連合取り扱い商品です。

検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg
※ 生しいたけ	九州	ND	ND	ND
※ 生しいたけ	宮崎県	ND	ND	ND
※ 生しいたけ	福岡県	ND	ND	ND
※ いいたけホダ木	福岡県	ND	ND	ND



グリーンコープ

未来へつなぐ20年 私の思い

グリーンコープの20年という歴史の中を、多くの
人、多くのコトが駆け抜けていきました。その一つ
とつがグリーンコープの中に刻まれ、グリーンコープ
の成熟へとつながってきています。この一年間、さま
ざまな人をおしてグリーンコープの歴史をひもと
いていきます。



グリーンコープが設立され
て20年、もうそんな年月が経
つていたのです。

1986年11月親友から誘
われて、ふたつ返事で生協に
入ったことを思い出します。

見慣れぬ商品を取りに行くの
が面倒でしたが、次第に興味
がわき、気が付けば地区理事
まで引き受けていました。婦
人会などで取り組んでいた

「せつけん」への疑問も解け
ていきました。理事長を経験
された某氏から「深みにはま
らんように」と忠告を受けた
にもかかわらず、まさに深み
にはまっていたのです。

グリーンコープの考え方と
その魅力とは。せつけんには
じまって、知れば知るほど私
を引きつけていきました。や
がて理事長を引き受け、グ
リーンコープ連合の理事をす
ること、四つの共生や平和の
取り組みなど、これまであま
り明確に考えてこなかった分
野が鮮明に、衝撃的に広がっ
ていきました。

いろんな面で消化し切れな
かった部分も多々ありまし

グリーンコープの魅力にとりつかれて20余年

たすけあいワーカーズひばり 代表 本村 美和子

た。理事長会で100円基金
(福祉活動組合員基金)につ
いて検討する時、深く考えず
「100円ずつ組合員が出す
とすごいことができるんだよ
ねえ」と語りあったことを思
い出します。その後、1996
年理事長を辞して組合員活動
としては見守る役を引き受け
ました。その間、自分でもあ
されるくらい生協にとつぶり
とかかわってきたのです。

「100円基金」が動き出
し、(長崎)でもそれに先立ち
ワーカーズ活動がスタート。
中期計画基本構想「夢ヲかた
ちに」が実現したことに感動
しました。

社会の変化に伴って、介護
保険事業を開始することにな
りました。そのことが(長崎)
の職員になることだとは思
いませんでした。年齢64、速
感かけるなあ」ということが
先行しましたが、現実には「や
るっきやない」と、みんな
協力し乗り越えています。

ワーカーズって仲間意識が
強いんですね。ストレスもあり
ますが、仲間が救われる毎日
です。しみじみと年月の重み
を感じ、グリーンコープの素
晴らしさに感動。グリーンコー
プの輪がもつと広がって、暮
らしやすい地域になっていく
ことが今は夢です。

20周年おめでとうございます。
22年前組合員募集の新聞チ
ラシを見て、その場で加入、そ
して班ができました。数年後2歳
の娘を連れて、さが事務所の荷
物に囲まれた古畳の理事会に参
加。食べものや環境、農業のこ
と等新しい情報を知ることが、
結婚後自分らしく生きにくい思
いで悶々としていた私にとって
自由で新鮮なことでした。また
グリーンコープ生協さの産直
生産者である八幡岳麓の藤瀬農
園へ出かけたことで、「グリー
ンコープ大好き」がインプット
されてしまいました。山里の景
色と野菜をちぎっては「がぶ
り」。掘っては嬉しい収穫体験。
息子は転んではふかふかの土の
上で寝ころがって、本当に楽
しい一日でした。

これからも生命をつなぐメッセージを

グリーンコープ生協さが
元理事長 於保 さつき



は、託児もなく、連合関係
の情報は理事長、専務からいた
だし、委員会活動で生産者訪問
や交流会の企画、広報、地区委
員会の立ち上げなど限られた時
間で慌しく活動していました。
その後、二日市(筑紫野市)で
開催されていた南ブロックの野
菜委員会へ参加。生産者との交
流会、援農へも出かけました。
同じ組合員というだけで自然と
話せることがまた不思議でし
た。その後連合の青果委員会に
参加。消費者と意識ある生産者
との出会いによって、「食の安
全」と同時に「環境や景観の保
全」など生協の社会的役割を実
感しました。また、消費者の選
択の大切さを学びました。

10年前、コープ神戸への視察
で、貧困層の民衆の自立と敗戦
直後の女性への生活支援、阪神
・淡路大震災での救援を学びま
した。そのことは「生協がなぜ
福祉？」という職員や組合員の
声に答えていく理事会の力とな
りました。「長崎」「ネグロス」、
「韓国」を訪れ平和と共生の精
神を学び伝え、小さな生協で仲
間たちと繋いでいく瞬間の日
々でした。

この20年を汗して支えてこ
れたすべてのみなさんに感謝い
たします。また昨今は地域のさ
まざまな場所が生協の「助けあ
いのこころ」で活動されている
みなさんの姿に出会っては私自
身が支えられています。

社会福祉法人のさらなる発展
や多重債務、ホームレス、パレ
スチナ支援など、これからもグ
リーンコープがとどまることな
く邁進されることを心から期待
しています。



20年の歴史を 振り返ってみて

グリーンコープ生協おおい
専務理事 松本 豊

私は22年前の1986年9月
に、それまで勤めていた東京の事
務機器メーカーを退社し、生活協
同組合おおいに入協しました。
大分で生協が活動をはじめてちよ
うど1年が経過していた時でし
た。当時は、「大分に新しい生協
を創る！」と多くの夢をみんな
語りあひながら、
身体的には本当に
きつかったのです
が、日々充実した
時間を過ごすこ
とができました。事
業として成立させていくため、急
速に拡大をすすめると共に「組合
員に働く場を、同じ組合員による
配達を」と考え、パートさんを積
極的に採用してきました。

しかし、人口が120万人余り
の大分県で新しい生協を作り発展
させていくことは、私たちだけの
力では到底無理でした。設立当時
はまたグリーンコープはなく、そ
の前身の一つである共生社生協連
合に物心両面の支援をいただき、
徐々に運動・事業の基盤を固めて
いくことができました。そして、
おおいが生協として法人登記を
した1988年にはグリーンコー
プ連合が結成されました。その後

は、2008年度おおいで
は、「人と人の共生」が息づく「地
域の再生」をめざして、生活再生
事業を開始します。グリーンコー
プ連合結成20周年を迎え、改めて
生協の原点、グリーンコープの原
点、私たち自身のグリーンコープ
へのかけわり方の原点、を振り返
る1年となります。
まず、それら
の原点を振り
返し、現在の
到達点を確認
し、生活再生
事業という新
しい取り組み
を通じて、グ
リーンコープ
の原点を大分
で実現して行
きます。

私もそうですが、生協の職員は
人や自然が好きです。これからは
職場や地域で、人と人とのかわ
りあいの中で誠実に働き、自然を
大切にしながら素直に生きていき
たいと思います。